

第2回 思春期に関わる指導者への自殺予防研修
事例から学ぶ
—「メンタルケースハンドブック」 中央法規出版より—

M.Y. 13歳,女 中学2年生

X年9月1日:飛び降り自殺

I 家族歴:

Mの家はある農村の古い集落のなかにあり,その集落は過半数がMと同じY姓であった。

Mは両親,父方祖父の4人とともに暮らしており,家業は専業農家であった。

父方祖父も現在と同じ家の生まれで,頑固、神経質であるという。父方祖母は父親が十代のときに病死しているが,性格は温和であったという。

母方祖父母はともに健在で,隣の集落で農業を営んでおり,そのかわり,近在の人々を相手に"降霊術"を施しているという。

父親は実父。健康であるが,人づきあいが苦手であったという。Mに対する養育方針について,父親自身は「放任,なにも口出ししなかった」と述べているが,母親の言うところによると子煩悩なところがあったという。Mは父親になついていたという。

母親も実母。隣の集落の生まれで,若い頃にその地方の中核都市にでて働いたこともあったが,結婚後は家業である農業に従事していた。気分がムラがあり,完全主義者で,Mに対しても細かいところまで干渉したという。Mの自殺の3年前から,食欲不振,倦怠感などのために,市販の安定剤の服用を続けていたという。

専業農家であった両親は,ともに多忙であり,Mにかかりつきりというわけではなかった。なお,両親の関係について,本人たちのいうところによれば特に問題はなかったというが,時に仕事上のことでMの前でけんかをするところがあったという。

父方の親戚に自殺既遂者が3人いるが,いずれも動機は不明であった。また,そのうち1人はMが10歳のときに自殺した。同じく父方に,自殺未遂のために入院したことがある者があり,Mの自殺についても「勇気があるなあ」という感想をもらしたという。

母の妹は十代の頃,失恋し,死ぬ目的で列車に乗り遠い北国の海岸まででかけたが,思い直して帰ってきたことがあったという。しかし,このことをMは知らなかった。なお,5年前に従兄弟が交通事故で死亡している。

II 既往歴・生育歴:

妊娠・出産:正常。特記すべき疾患なし。初経は11歳。

現住所にて出生。両親が多忙だったため,昼間は主に母方祖父母がMの面倒をみていた。

幼稚園の時,「幼稚園に行きたくない」と登園をしぶったことがあったという。小学校もはじめは少しぐずったが,不登校はなかった。小学校2・3年の頃・頭痛や腹痛を訴え学校を休んだことが数回あったが,いずれも母親が「学校へ行きなさい」と叱ったところ登校した。

なお、この頃まで夜尿があったという。

小学校高学年では、担任教師に励まされたこともあり、休まずに登校した。級友からは比較的好かれていたようで、いじめられるようなことはなかった。

成績は中程度だったが、国語が得意であった。この頃から推理小説を愛読しており、そのなかには、のちに M が自殺場所として選んだ土地を舞台にしたものもあった。

なお、夏休みの終わりになると「宿題が終わってない」といって泣くのが常であった。また、この頃から例年、夏休みには泊まりがけで海に釣りに行くことを楽しみにしていた。

III 経過：

中学校入学後は、すぐに友人もできたが、教師に叱られると、すぐにふてくされてしまうようなところがあったという。M が希望していた部活にはいわゆる「不良グループ」がいたため、M はしかたなく他の部活に入った。以前は学校から帰るとすぐに遊びに行ったりしていたのだが、中学入学後は帰宅するとすぐ寝込んでしまうことが多かったという。また、中学校 1 年の時に「ひとり旅をしたい」、「ひとり暮らしをしたい」などと言ったことがあるという。

中学校 2 年になってからは徐々に成績が低下してきた。また、母親によれば「5 月頃からあまり笑わなくなってきた」という。

その夏は両親の都合で旅行はできず、それが M には不満で、「つまらない、つまらない」とぼやいていたという。

8 月初旬に M は父親に「海に行きたい」と訴えたが、父親は「車が渋滞するからだめ」といって聞き入れなかった。

中旬には母方祖父母のところに泊まりに行ったが、ひとことも話さず、しょんぼりとしていたという。

下旬からは考え込んでいることが多くなり、また、この年も夏休みの宿題には手をつけていなかった。

8 月 23 日、父親が「釣りに行こう」と誘ったが「やっぱりやめる」と行こうとせず、また、8 月 30 日、親友が「町に遊びに行こう」と誘ったが、やはり行かなかった。

8 月 31 日午後、祖父に「行ってきます」といって家をでた。翌 9 月 1 日早朝、海岸の岩場で倒れているところを釣り客に発見され、すぐ病院に運ばれたが、2 時間後に死亡した。遺書はなかった。

IV まとめ：

本事例は自殺発生後に関係者(家族、学校関係者)の協力を得て事情を聴取したもので、自殺既遂事例の貴重な記録である。

一般に、自殺は準備状態が形成された上に直接動機が加わって生じるとされている。準備状態が深刻であれば直接動機はささいなものであっても自殺は生じ、またその逆も言える。

マスコミなどでは直接動機のみが取り上げられることが多く、そのために我々は青少年の自殺について、「なんであの子が」などといった感想を持ちやすい。

本事例における直接動機は、①海に連れていってもらえなかったこと、②夏休みの宿題ができていなかったこと、の2点で、いずれも些細な事柄であり、本事例において重要なのは、むしろ自殺の準備状態であると思われる。

まず、自殺の家族歴である。自殺そのものが遺伝するということはないが、因習的な農村社会において、問題解決の手段の一つとして死を選ぶという雰囲気の中かで育ったということは重要である。

また、青少年の自殺にとって重要なものは生と死の間の不可逆性についての認識であるが、本事例において、母方の「霊能者」的家風は、Mをして、生と死との境界を慶味にせしめたものと思われる。

M自身の性格も、何度か不適応を起こしているように、もろいところがあったものとみられる。

このようなMが、そうでなくても不安定な思春期を迎えたことにより、生と死の間を揺れ動く両価的な心理的危機状況におちいったのである。この心理が「ひとり旅をしたい」などの自殺の予告兆候となって外に表れたものと考えられる。

なお、青少年の自殺の場合には、遺族のメンタルヘルスケアが特に重要である。遺族の多くは抑うつ的となり、自責の念にかられ、近隣やマスコミの好奇の眼差しを恐れている。残念ながら自殺者の遺族への援助については、まだ組織だったものはないのが実情である。

V 遺族の反応：

父親は「やられた!と思ったが、警察による事情聴取や葬式のときは意外と気が張っていた。四十九日以降の方が寂しかった。3か月ぐらいでやや持ち直したが、ちょうどそのころ知り合いが急死し、落ち込みが長引いてしまった。いじめなどのように、憎む対象があればもう少し心の持ちようが違ったと思う。」と述べている。

一方母親は「しばらく不眠に悩まされた。Mの部屋を片づけようとしたときに、自分も死んでしまいたいというような気持ちにかられた。結局、部屋はそのままにしてある。また、新聞の死亡、自殺記事に非常に敏感になった。」と述べている。